

「文化と自然」 地域資源を活用した観光振興（阿仁町）

豊富な自然資源を背景に、かつて「マタギ」と呼ばれる厳しい掟の中で狩猟を生業とした人々が多く存在した阿仁町。自然景観に恵まれ、マタギの生活拠点であった奥阿仁地区には、現在観光拠点としての「マタギの里」エリアが展開しています。

独自の生活習慣を

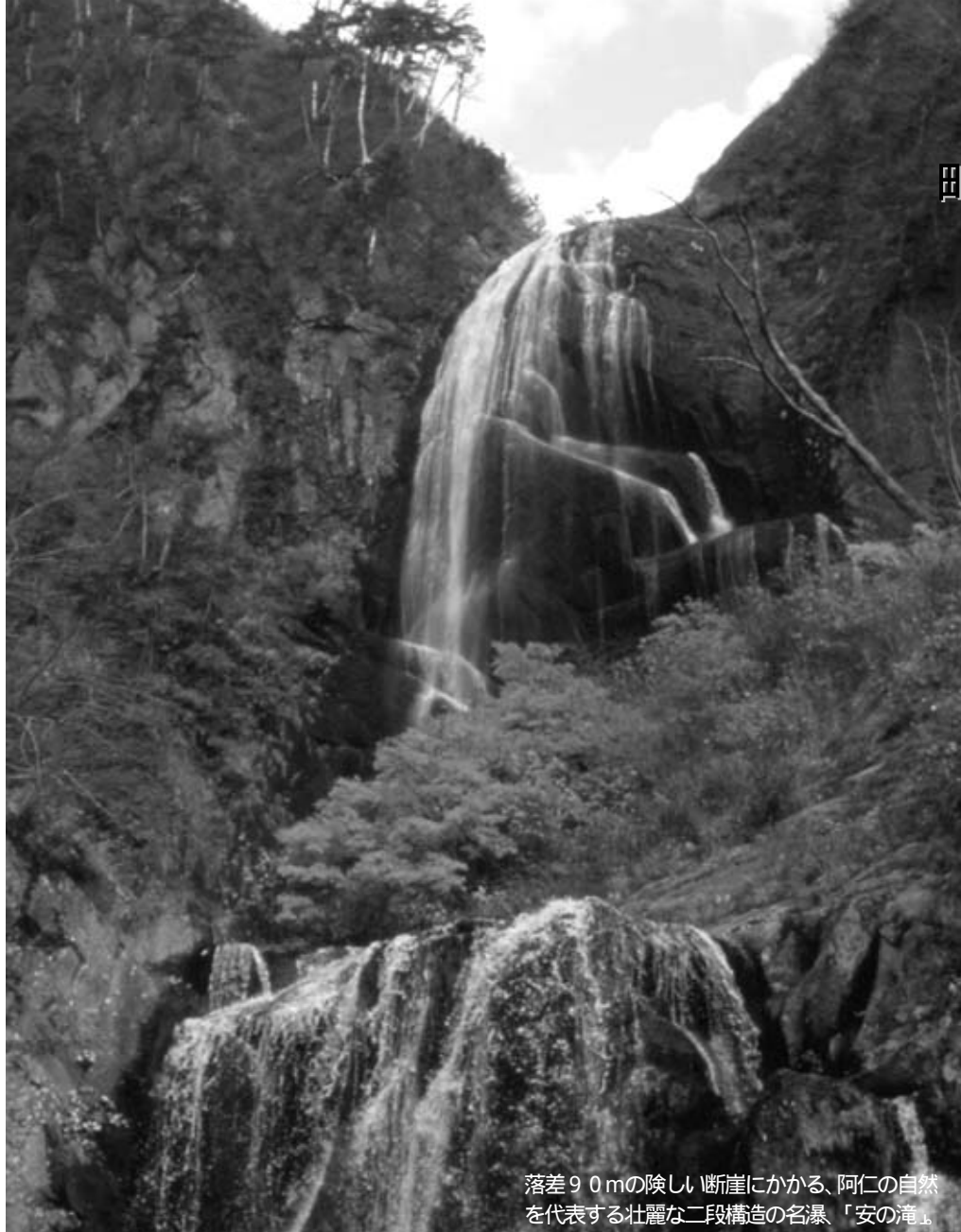
持ち続けた集落郡

森吉山をはじめとする1,000m級の山々が複雑な山容で起伏する一帯を猟場の中心とし、古い伝統と独特の信仰を継承してきた狩人集団、「マタギ」。かつて日本随一の銅の採掘量を誇った旧阿仁鉱

山とともに、阿仁町を代表する文化です。

四方の山々の原生林を、熊カモシカ、野ウサギなどの獲物を追って、マタギは山から山へ渡り歩きます。組織は3人から15人、時には大掛かりな「巻狩り」を決行するため、40人を超す組を結成することも稀にありました。滞在は概ね3日〜12日間、30日を超える猟もあります。山に関する知識も豊富で、衣装や猟具もまたマタギ独自に考えられてきたものでした。

阿仁マタギの住んでいた中心地は、8km程の間隔で点在する根子・比立内・打当の各集落。高峻険阻な山岳に挑み、常に雪崩などの自然災害に遭う危険にさらされるマタギは、いつとはなしに護符・呪物崇拜の自然宗教に目覚め、それが山岳宗教と結びついて、山神を崇拝するようになりまし



落差90mの険しい断崖にかかる、阿仁の自然を代表する壮麗な二段構造の名瀑、「安の滝」



大正時代のマタギ衆



「遊遊ガーデン」の園内で一際目立つジャンボアスレチック。

た。儀式や祭事、戒律、階級、山言葉など、マタギ独自の生活習慣は、全てこの山神崇拜に起因しています。

また、この山神を中心とした作法はマタギ当人だけではなく、留守宅の家族や集落にも必要とされました。

こつとして育まれた独自の信仰と生活習慣の面影は、マタギの存在しなくなった現在でも、かつてマタギを生業とした人々の住んだ地域に色濃く残っています。

マタギの拠点の一つ 奥阿仁を観光拠点に

阿仁町では、昭和50年代から観光を立町の柱として、各種整備を進めてきました。その一つが、マタギ集落の打当地区に展開する「マタギの里」エリアです。この地区は、平成2年に「日本の滝百選」の第2位にも選ばれた、阿仁町の最も重要な観光資源「安の滝」をはじめ、立又溪谷の名瀑群に通ずる道路に面していることもあり、奥阿仁にもかかわらず多くの観光客が通過する場所となっています。

打当温泉の湧出から周辺整備を開始、58年には「ふる里



新設となり設備も大幅に充実した打当温泉「マタギの湯」。

い観光拠点宿泊施設となる「マタギの湯」が打当温泉新館としてオープンしました。湯量の豊富さと湯船の充実に加え、宿泊設備や食事処等も大幅に拡充され、近年の大幅な観光客の増加に対応できるようになり、また、宿泊拠点が整備されたことにより、観光モデルコースを確立できるようになりました。同時に、地域住民への開かれたサービスも向上しています。

センター」に貴重なマタギ関連資料300点を展示、平成2年に日本でも珍しい「熊牧場」をオープン、平成8年には釣堀とバーベキューハウス、レストラン、遊具施設を備えた淡水魚パーク「遊遊ガーデン」をオープンさせるなど、これまで豊かな自然を生かした地域性の高い文化・レジャー施設を展開しています。

リニューアルした 打当温泉「マタギの湯」

平成12年、これまでの温泉施設に隣接した場所に、新し

さらにこれに合わせ、「マタギ資料館」もほぼ同時にリニューアルしました。展示内容の老朽化とマタギ文化を語り継ぐことのできる人々の高齢化に対応した資料等の早期保存、また、「マタギの湯」との棟続きによる施設連携が図られ、マタギ伝説の伝承とともに、観光全体の底上げを担っています。

山村の個性を生かす まちづくり

打当地区の他にも、阿仁合の国重要文化財指定を受ける

「異人館」と阿仁鉱山の歴史を伝える「伝承館」、大手企業経営によるスキー場、200種300万本を誇る「花しよつぶ園」など、見所の多い阿仁町。新緑や紅葉・樹氷を堪能させる内陸縦貫鉄道の企画列車やスキーリフト運行などイベントも充実。また、「またたびワイン」をはじめ、特産品開発にも力を入れています。



マタギの使用した道具等を展示する「マタギ資料館」。

総面積のうち、92%以上を森林に覆われる、雄大な自然景観と特異な歴史文化を背景に、地域性を打ち出した振興事業の展開は、本県の山村の個性・特色を十分に生かしたまちづくりとなっています。